

# 震災を受けた観光地の復興事例 ～兵庫県神戸市有馬温泉～

近畿・中国ブロック 吉田 信子

## 1. はじめに

1995年1月17日に発生した、阪神・淡路大震災から22年が経過した。淡路北部から神戸市及び阪神地域を襲った「兵庫県南部地震」は、震度7の「激震」であり、戦後初めての日本の大都市で発生した内陸・都市直下型地震であった。その後22年の間に、新潟県中越地震、東日本大震災、そして熊本地震と震度7の大地震が発生しており、人的被害が発生した地震は70回以上にも上る。大切な人や貴重な財産を失った悲しみは、月日がたっても消えることなく、心に重くのしかかる。今年も1.17には東日本・熊本の震災で亡くなられた方々も一緒に追悼する行事が各地で行われた。熊本地震で被災された方々の生活再建と、街の復興が早期に達成されることを願ってやまない。

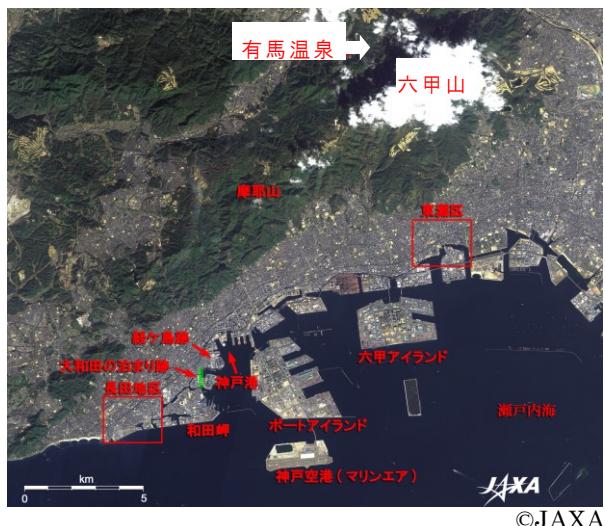


## 2. 有馬温泉における被害

有馬温泉は神戸市北区にあり、六甲山頂から北側の紅葉谷の麓の山峠にある一辺が約1kmの三角形の温泉街である。有馬はもともと有間と書き、山と山との間という意味で、その通り周囲を山に囲まれた温泉地である。アイヌ語で「火の燃える谷」という説もある。

1400年の歴史に彩られ、日本三古泉（有馬温泉・白浜温泉・道後温泉）、日本三名湯（有馬温泉・草津温泉・下呂温泉）と称されて、僧行基や太閤秀吉など歴史上の人物がたくさん訪れている有名である。

温泉街は標高350m～500mに位置しており、かなりの急斜面にあって、街中を通る道も細い。大きな旅館やホテルは温泉街の周辺や少し離れた山麓、山中にある。震災当時、震源地が淡路島であり、阪神間の被害の大きさがクローズアップされたため、北区の被害についてはあまり報道されることもなかったのだが、伊丹から宝塚、有馬の断層面が動き有馬温泉も大きな被害にあった。有馬温泉は400年サ



イクルで地震が起き、その復興が歴史であるとも言われている。



有馬温泉、山沿いの被害撮影者：大木本美通

震災で大きな被害を受け、宿泊客は激減した。平成3年には年間192万もの観光客が押し寄せたにも関わらず震災が発生した平成7年には102万人にまで落ち込んだ。建物の被害、山肌の崩落、泉源の変化、そんな中で温泉街の人々は自らが被災しながら被災者のために温泉を開放し、全国の力を借りて避難所に物資を届け、炊き出しなどを行った。

### 3. 復興の取り組み

官民一体となって復興を行う中で、新たな動きが始まる。復興プランの一つとして「昼食と温泉」という日帰りプランを販売。すると旅館での昼食に溢れた人や昼食の時間の前後を利用し多くの人が街を散策し始めた。四季折々の花の名所や見所、散策時間を入れた「有馬花鳥風月」というマップを作成し、有馬の魅力をPRした。その頃街に活気を取り戻そうと数々の震災復興イベントをはじめ、温泉街全体の賑わいづくりを仕掛けた人物がいる。現在の有馬温泉観光協会会長で、老舗旅館「陶泉 御所坊」第15代当主、金井啓修氏である。温泉観光を核にしたコミュニティビジネスでまちのブランド力向上と活性化を進めるカリスマ」として観光庁による「観光カリスマ」にも選定されている人物である。その取り組みを見てみる。

#### ① 外湯を整備し、そぞろ歩きできる環境づくり

もともと「温泉会館」が唯一の外湯だったが、外湯巡りや日帰り温泉の需要が高まるのに伴い神戸市が2001年に「銀の湯」、2002年に「金の湯」を開館。足湯も設けた。

#### ② 「まちなみ」を考えるしきけづくり

古い建物を活かしたホテルの再生やまちを歩かせるしきけづくりをきっかけにまちなみを考えるようになり「景観形成市民協定 まちなみ基準」を策定。有馬町活性化委員会には「まちなみ部会」が発足。建物の高さ、色彩への配慮、看板、門などに基準を設け、有馬らしいまちなみをつくろうという考えが地域全体に広がりつつあるという。

#### ③ 外国人観光客の誘致

街の中の看板を日本語、英語、中国語、韓国語の多言語で表記。ガイドブックも多言語化し、外国人スタッフも雇用。

#### ④ イベントで賑わいづくり

夏の期間中、有馬川に川床風の座敷を設けて芸者さんのビアガーデンを開催。

#### ⑤ モノづくり人間が集まるしきけづくり

有馬の立地条件や自然環境にはモノづくりをする人々が集まる要素があると考え、ギャラリーや博物館の設置などの取組を進めている。

平成26年には166万人にまで回復。一時は古くて高いイメージが強く敬遠された温泉街は震災後そぞろ歩きが楽しめる「また来たくなる」そんな温泉へと変貌を遂げている。